

HKFA Technical Report 2018

第42回 全日本U-12サッカー選手権大会北海道大会（決勝）

日時

平成30年10月6日(土)
～8日(月・祝)

会場

苫小牧市緑ヶ丘公園サッカー場

決勝戦

北海道コンサ ドーレ札幌U- 12WEST	(1-1)	エスピーダ 旭川
	(0-0)	
	(0-0)	
	(1-0)	
Total 2-1		

HKFA TSG member

小林 俊也(U-16)

宮本 英樹(U-14)

長田 拓生(U-12)

熊谷 卓郎(U-12)

伊藤 公 (U-12)

宮永 裕教(TSG チーフ)



1 事業の概要（大会主催者へのインタビュー）

＜4種委員長 神谷敦氏＞

悪天候に見舞われましたが、人工芝のグラウンドでの開催ということで、大きな影響がなくてよかったです。準決勝のコンサドーレ対決は両チームともかなり力が入ったゲームになりました。コンサドーレ札幌は、昨年度の全国大会で準優勝しているチームですので、この決勝戦においても全国レベルの質の高い試合になることを期待しています。

2 両チームへのインタビュー（試合前）

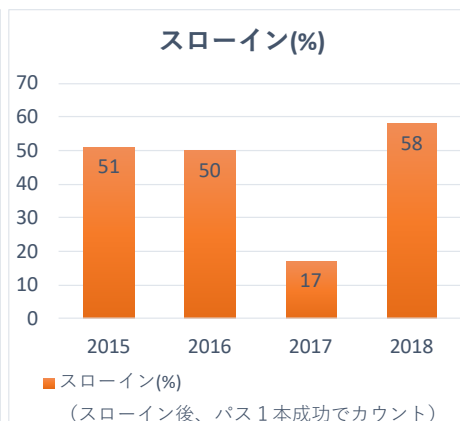
＜コンサドーレ札幌 U-12EAST 監督 鈴木健士 氏＞

この大会は選手・チームにとって最終目標ではなく、通過点ととらえ、小学生年代で身に付けるべき技術（テクニック）やゲーム感を養うことを年間通じて取り組んできました。また、決勝戦に向けては、自分たちの目指すサッカーをして、全国大会へ出場することを目標にし、試合に出られなかった選手の分もたたかう姿勢で臨みたいと思います。個人で仕掛けられる選手が何人かいるので、ボールを繋ぐことを大事にしながらも、パスだけではなく、仕掛けられるところは積極的に仕掛けていくサッカーを展開したいと思います。

＜エスピーダ旭川監督 中川 鉄平 氏＞

ロバパンカップの地区予選では、チームとしてやろうとすることがうまくできず、チーム内でマイナスの声かけがあったり、自分達のミスから失点し敗退しました。その後、ゼロからスタートし、攻守において関わることや主導権を握るために自分達から能動的に動くこと、去年からの課題であるヘディングなどの質を上げることを意識しトレーニングを行ってきました。また、色々なシステムを試し、ゲームプランを変えられるようにもしてきました。

決勝に向けては、プロのクラブチームを相手に町クラブが驚かすようなゲームをしたいし、歴史を変えられるよう思う存分挑戦したいです。



<データ比較>

ポゼッション回数は減少傾向にあるが、チームのたたかい方や守備の強度によっても左右されることから、一概にゲームのレベルが下がっているとは言えないであろう。一方スローインについては、両チームともに改善が見られ、他のチームのモデルケースになると考える。

3 成果① OFFの動き

両チームの得点シーンを見ると、どちらも中盤でボールを繋ぎ、トップの選手が相手のCBを惑わす駆け引きをしながら、得点していた。

具体的には、守備側の1stDFの決定が決まらない状況を察知して、CBに近づいたり離れたたりしながら、相手の裏を突き、決定的な場面を作り出していた。

ボール状況や相手DFの立ち位置によって、どこに、どのタイミングでポジションをとればチャンスになるかを考えながら、プレーする場面が見られた。

4 成果② ターンの技術の向上

攻撃面では、優先順位を意識し、相手の背後をねらうプレーやトップへのくさびを入れるプレーが今年も随所に見られた。

その中で、DFのアプローチが少し遅れた時には、素早い反転から前を向くプレーが見られた。相手の守備の寄せが緩いと、狭いエリアでも果敢に前を向こうと積極的にトライしていた。守備側の寄せが厳しい時には、無理せずリターンするなど、ボールを失わないようにするなど、状況に応じたプレーを選択し、テクニックを発揮している場面が多く見られた。また、トップへのくさびだけではなく、中盤での横パスに対しても、ボールが動いている間にコントロールで相手をずらし、主導権を握りながらゴールに迫るシーンが見られた。

5 GKのプレー

【守備】<シュートストップ>

ペナルティーエリア付近からのミドルシュートが多く、ゴールの枠から外れるシュートに対しても良い準備から、しっかりと足を運びつつ対応していた。サイドに飛んでくるシュートに対しても、GKの良い準備から、しっかりとボールをディフレクティングする場面が見られた。課題としては、バイタルエリアで相手選手に簡単にシュートを打たせている場面が多かったので、DFと連携してゴールを守ることが課題として挙げられる。

【攻撃】<ディストリビューション>

決勝戦ではGKからボールを失わず、相手ゴール前までボールを運ぶといった場面は多く見られなかった。テクニックでは、ボレーキックを含めてボールをしっかりと蹴れていた。風の影響もあったが、前線にロングパスを出すことができていたので、味方との連携を高めるとボールを失う回数は減り、効果的な攻撃につなげることができると思われる。

【まとめ】

決勝戦では、両チームのGKがプレーした回数は50回で、試合時間が延長戦も含め50分であったことから、平均で1分に1回はGKがプレーしており、常にゲームに関わっていることがわかる。

そのため、GKのプレーは試合に大きな影響を与えるが、準決勝・決勝では、GKのゴールを守るテクニックが全体的に向上しており、拮抗したゲームが多かった。

6 課題① パス&コントロールの質

攻撃の優先順位を意識しつつ、相手の守備陣形が整っている時には、簡単にボールを失わないようにビルドアップをしようとする意識が見られた。しかし、パススピードが遅くインターセプトをされたり、素早く相手に寄せられてしまい、苦しみような場面が多くあった。日常からパスの質（方向・強さ・タイミング）の向上を意識しなければならないし、パスを受ける側もボールを待ってプレーするのではなく、ボールに寄りながら正確にコントロールできる技術を身につけなければならない。また、試合終盤では、GKからのボレーキックで相手ゴール前に放り込む場面が多くなった。リスクがなく得点をとるために、最善のプレーなのかかもしれないが、次のカテゴリーに進んだときには、ピッチも広くなり状況が変わる。GKがボールを保持したあとの素早い関わりも、意識していきたい。



7 課題②

守備の際、ボール保持者に対して、誰が寄せに行くのかはっきりしない場面があり、数的には足りているのにずるずるとラインが下がり、相手に自由にプレーをさせてしまう場面が見られた。周りからの声かけや自分で周りの状況を素早く把握し、適切な判断ができるようにしたい。また、チャレンジの意識を強くもつあまり、相手とマンマーク気味になってしまい、1対1でかわされるとそのままピンチをまねくような場面も見られた。オフの際のポジショニングは、今後の課題だと感じた。

8 両チームへのインタビュー（試合後）

＜コンサドーレ札幌 U-12EAST

監督 鈴木健士氏＞

ゲーム開始直後の立ち上がりは、攻め込まれる場面がありましたが、その直後に得点を奪えたことで、前半は自分たちのペースで試合を運ぶことができました。しかし、後半に入ると自分たちのミスからカウンターを受け、押し込まれる場面が多くなったと思いますので、そこは修正点であると感じています。

＜エスピーダ旭川監督 中川 鉄平 氏＞

突破力のあるトップに対して、チャレンジをするのかカバーをするのかというところで遅れたり、あいまいになった部分がありました。後半は、いい形もつくれましたが、決めきれないところが課題だと思います。6年生だけでチームを組んでいたこともあり、選手層という面では薄い部分があったかもしないのですが、2チームが全道大会に出られたことはよかったと思います。最後の場面では、PK戦になるだろうと一瞬の気の緩みがあったのかもしないです。これからも、さらにレベルアップを図りたいと思っています。

8 まとめ

本大会は、悪天候による影響で大会日程の変更もあったが、コンディションの安定した人工芝ピッチの利点が活かされた質の高い決勝戦になったと考える。

最後になりましたが、4種委員長の神谷氏をはじめ、苫小牧地区サッカー協会のみなさまには、HKFA/TSGの活動にご協力いただき、心から感謝申し上げます。

世界基準を日常に
日本のトップレベルを目指す北海道
5ブロックで一貫指導体制の構築